

会話における「あいづち」の機能  
—電話会話を分析して—

岡本 能里子

(1991, 6.8 発表)

1. はじめに

日本語のあいづち研究は、日本語の会話が実際にどのように展開しているのかを調べる上で、重要な手がかりになるものである。自然な日本語会話能力習得をめざす日本語教育の必要性からもさかんに研究されてきている。今回の発表は、電話会話を分析することで、実際にあいづちがどのように現れているのかを調べ、これまでの研究と照らし合わせてあいづちの機能を考えてみようとするものである。

2. あいづちとは何か

これまでのほとんどの研究であいづちの機能は、「聞いていること」や「分かっていることを示し」たり、「話の進行を促し」たり、「話の進行を助ける」ものとして説明されてきた。しかし、あいづちが会話の進行を助けるという観点から留守番電話にあいづちを取り入れた実験が行われたが、あいづちを入れない方が話しやすいという結果になるなど単にあいづちを打てばいいというわけではないことがうかがえる。また、応答詞との区別なども研究によって異なっており、その機能や効果はまだ明確になっているとは言えない。その意味から実際の電話会話を分析して更に検討してみることが必要であると考えた。

3. 電話会話集録と分析の方法

友人に依頼し、テレフォンピックアップを設置してもらい、かけた電話、かかってきた電話は問わず録音してもらった。それをおこし文字化し、談話分析を行った。

#### 4. 結果と考察

##### [資料1]

まず、中学生（男子）とその祖母との会話を見てみると、中学生は、祖母の話に対してあいづちを打ち続けている。はじめは、祖母の話の進行を促しているとは解釈できるが、Rの発話①あたりからは、話の進行を助けたり、促したりしているとは言えず、逆に「話の進行を止める」方向へ機能しているといえる。

##### [資料2]

次に、あいづちを打った側の意図とその効果との関係から、あいづちの機能を記述することに対する困難点を考えてみる。「話の進行を促し」たり、「話の進行を助け」たりするという機能は、聞き手側からの意図としてそうであって、話し手側からはそうではなかったり、結果的にそうになっていない場合があることがわかる。資料2の会話を見ると、Cの発話②では、次のRは、Rの発話に対して「分かっている」ことを示していると解釈でき、次にRは話を進めることができる。しかし、次のCの③の発話は話し手の意図としては②と変わらないのではないかと思われるが、それが話の進行にはつながってはいっていない。Cは、Rがもう言うことがないことを次のRの発話④で察知し、⑤では、あいづちではなく納得したことを述べてターンをとり、次の話題へ入ってはいっている。ここでの発話③をあいづちとしてとらえてあいづちに「相手がもう言うことがないことを知り、自分のターンをとる機会を開く」という機能があると説明するのか、これはあいづちと解釈しないのかは判断に迷うところである。特に発話②との区別は微妙である。

##### [資料3]

聞き手の打ったあいづちが話の進行を助けているのかどうか、または適切だったかどうかの判断が、聞き手のあいづちの後の話し手の発話から推測できると考えられる。資料2の発話②以前のあいづちのようにあいづちの後にうまく入れられたあいづちの後の話し手の発話は、滞ることなく調子よく続けられる。それに対して、資料3の日本人と留学生の友達同士の会話では、Cのあいづちの後にRは常に「うん」を入れており、そこで会話が一瞬滞るのがわかる。あいづちは適切な打ち方をしないと逆に会話の進行が妨げられることになり、タイミングと表現形式の両面からあいづちの「適性さ」が検討されなければならないであろう。

## 5. まとめ

会話における効果の点からあいづちの機能を考えるには、実際の会話の分析を通し説明することが必要である。なぜなら、進行を助けるだけでなく、結果的に進行を止めたり、相手の意図を探ってターンをとることになったりするからである。また、相手の話の進行を助けるために打ったあいづちが、その意図通りの効果を得たのかは、その次に続く発話と全体の流れを見てはじめてわかるからである。

日本語教育の中におけるあいづち教育の面から考えた場合、初級から中級にかけては、話を聞いていることを示すことで、相手が話を進めていけるような、聞き手としてのあいづち教育が大切であろう。一方、中上級レベルでは、相手の話に興味や関心があることを表したり、積極的に2人で話を作りあげていくようなあいづちや、会話を終わらせるために会話の流れをうまく止めていったりするためのあいづちなど、対話者としてのあいづちが打てるような指導が望まれる。そのためには、表現形式だけではなく、タイミングも含めた指導が必要となる。今後も談話分析を通してあいづちの会話における効果を更に詳しく調べ、表現形式に付随した形の固定的な機能だけを考えるのではなく、会話全体の流れの中でのあいづちの果たす役割を検討したいと思う。そして、これらの教材化も同時に考えていきたいと思っている。

\* C = かけ手

R = 受け手

〔資料1〕 (孫と祖母の会話)

C : あのね、おばあちゃんねえ、

R : はい。

C : あのときに寄ったらねえ、あのー ほれー、お彼岸にね、

R : はい。

C : 行かれないかもしれないから

R : あー、そうですか。

C : うん、だからそのー、またー そー連絡するけどね

R : はい。

C : ね。( )のことをね、

R : はい。 . . . . . ①

C : はい。

気をつけてね。

R : はい。

C : 学校始まれば疲れるからね。

R : はい。

C : んー、元気で行ってる？

R : はい。

C : んー、じゃね。〔はい。

R : 〔はい、おやすみなさい。

C : はい、おやすみなさい、はい。

〔資料2〕 (マンションの管理人と住人の会話)

- ・
- R : あっ、調べればわかりますから。  
それでね、ま、とりあえずですねえ
- C : ええ はい
- R : あのー、そこの吹きこむっていいですか、ま、隙間にですね
- C : はい
- R : あのー、ま、雑巾みたいなものをですね。はっておいて頂いてね
- C : はいはい
- R : とりあえずは、そういう防御をしておいて頂きたいと思うんですよね
- C : はいはい
- R : それで、あのー我々の方でま、巡回に行くとき、行った時にですね
- C : はい、
- R : あのー、どんなようすかですね、修理ができるものかとかね
- C : はい
- R : どうかってものをね、ちょっと見た上でね
- C : はい
- R : あのー、判断したいと思いますんでね
- C : あっ、そうですか . . . . . ②
- R : ですから、巡回の時にね、えーお寄りするようにしときますよ
- C : あ、そうですか . . . . . ③
- R : え。 . . . . . ④
- C : あ、わかりました。じゃ えっと . . . . . ⑤
- ・

〔資料3〕 (台湾の留学生と日本人学生の会話 友達同士)

- ・
- R : 今からねー、××さんところに泊まりに行くの
- C : あー そう
- R : うん、なんかねー △△さんところに泊まろうかなと思ったんだけどいない  
みたいだったし  
で、××さんところ私とこから、私とこと学校の間にあるのね、ちょうど
- C : あ、はい
- R : うん、だからねえ
- C : はい
- R : ちょうどいいし、なんかさっき電話して聞いたら、うちにあそ、あの、  
泊まりにおいでよとか言ってくれたから
- C : あ、そうですか
- R : うん、今からシャワー浴びてから行こうかなと思って フッフ
- C : フッフ
- R : うーん、  
じゃ、またね、あのね、寮にね、寄るわ、今度
- C : はい
- R : うん、だから、なんか、また相談にのってね
- C : あー、わたしも、本当によろしく
- ・

(東京国際大学)